



旭区 介護相談員だより



平成23年10月 第7号

事務局 旭区鶴ヶ峰1-4-12 旭区役所福祉保健センター高齢・障害支援課内
電話 045-954-6061

3月11日 震災時とその後 施設を訪問しての感想

平成23年3月11日(金)、三陸沖を震源とする大地震と津波が発生し、東北地方で大きな被害がありました。旭区内の介護保険施設において、地震発生時にどのような対応をされたのか、介護相談員が利用者・施設職員に話を伺いました。

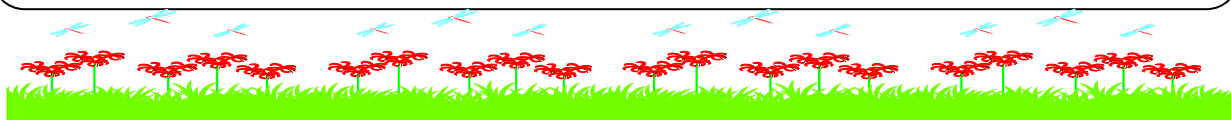
旭区でも多くの被災された高齢者を受け入れており、介護相談員として施設を訪問することで、施設内の高齢者・職員の話聞くことができました。震災当時の施設では、停電中もなんとか人力で、普段どおりのサービスを行うことができたという、安堵しました。また、利用者の中には、被災当時のことを覚えていない方もいて、とても落ち着いた生活をされていました。施設職員の対応については、被災者を区別することなく、落ち着いた対応がされていました。

震災時は歌の合唱を行っていた。職員の指示でテーブル等に掴まり、静かに揺れが収まるのを待った。水槽の水が大きく波打ち、床に流れ出した。揺れはかなり大きかったが、職員の対応が良く、他の利用者もいたので安心したとの声もあり、利用者の動揺は何えなかった。停電により、エアコン・エレベーターが使用できなかったため、室温が保てず、食事の運搬が大変だったが、職員とボランティアの落ち着いた対応で乗り切った。今後の停電対策として、自家発電装置の設置が必要と思われます。

施設の利用者は皆、「怖かったけど、どこにも行かなかったよ。職員の言うとおりにしていれば安心だからね」と言い、施設を信頼しているようです。施設側は震災を受けて、地震・火災共にマニュアルを再点検し、見直されたとのこと。施設には燃料や酸素吸入ガスボンベ等の備蓄はあるが、備蓄量には限度があり、災害時に足りなくなることが想定されるため、遠く離れた地域との防災協定を交わすことが有効であるという職員の話もありました。

某夫婦が避難先として入所して居られた。「この施設は4回目の避難場所だ。自分の家は高い場所にあり、下を見ると知った人は皆、津波でいなくなった。施設の様子には慣れてきた。職員の皆さんは良くしてくれる。でも自分の家も畑も田んぼも残っている。早く家に帰りたい。」と切々と話される姿に、胸にこみ上げるものがあった。こうした避難者を横浜の施設ではどのくらい受け入れて頂けたのだろうか。

地震当日はエレベーターが止まったため、食事の運搬等を人海戦術で対応し、食器に関しては使い捨ての物に変更して、節電・節水に努めた。輪番停電等で停電や断水はあるが、今は何ができないと思うのではなく、「今できることをやる」との施設の方の言葉が利用者への取り組み姿勢に現れていた。地震のことを利用者に聞くと、「ここにいれば何の不自由もなく大丈夫」と安心されていた。



非常時の訓練を日頃から行っていたので、地震発生時は、職員も利用者も冷静だった。非番の職員もすぐに施設に駆けつけ、停電時にも普段と変わらないサービスができたことは施設全体の誇りとのこと。また、暗い中でも位置確認ができるように、廊下に発光テープを貼り付けた。日常生活にも活用できて、良いアイデアだと思います。自家発電装置はあったが、燃料が手に入らず、手動では施設全体の電力供給ができないため、今後の課題となった。

「戦争の事を思えばあの位なんでもない」、「真っ暗になって怖かった」、「地震？知らない」などの声があった。利用者は動揺もなく、具合が悪くなった方もケガされた方もいなかった。施設の対応は、食事作りにはランタンや使い捨て食器を使い、入浴時間を早めるといった工夫をしていた。出勤できない職員もいたが、近くの職員で対応できた。困った点はオムツが入ってこなかったこと。これは今後の課題であると話されていた。大変な中、よく対応できていると思いました。



地震が日中だったことや、建物がしっかりしていたこともあり、それ程慌てなかった。停電については、自家発電が2時間位作動していたが、自家発電が通っていなかった場所もあったため、トイレや厨房が真っ暗になってしまった。暗い中での食事は大変だったが、ボランティアの協力を得て、無事に食事をすることができた。利用者の中には、テレビで被災地を見て、戦争を思い出し嫌だといっている方もいたが、多くの方は落ち着いていた。

施設の職員の話では、大きな被害はなかった。停電の影響で通勤できない職員に代わり、近所の職員にシフト交代をして対応していた。エレベーターが止まっていたので、食事は非常階段を使用して運んだ。停電した時間が夕方、だんだんと暗くなったが、利用者はそれ程混乱しなかった。電話が通じなかったため、家族への連絡は復旧後になった。懐中電灯・ヘルメット等の不足しているものを買ひ足し、保存食の保管量を増やしたそうです。



震災発生当時は、日中であったためか、区内の施設に大きな混乱はなかったと聞いています。利用者は高齢者であり、体の不自由な方も多数いるため、恐怖や不安も大きかったことと思います。そのような中で、職員の安全確保の過程は適切であったと思います。職員の「大丈夫、大丈夫」との声掛けや、利用者同士の声掛けがあり、不安を和らげてくれました。地域との防災協定を締結し、防災関係機関との情報交換や研修を行いながら、震災の経験を基に、地域と共に検討している施設の姿勢に安心しました。

震災当日、施設では停電によりエレベーターが使用できなくなり、食事場所や配膳方法の変更を余儀なくされた。暗い中での食事に不安を感じながら、なんとか夕食を終えることができたが、職員は後片付けも大変だったとのことでした。今回の震災の様に、ライフラインが止まってしまうような想定外の大きな混乱状態が発生しても、冷静に対処できるように、職員各自の役割を明確にし、訓練をより多く実施することが大切であると思いました。



新介護相談員の紹介

菊池 笑子	担当：グループホーム華寿園	・フレンジィ本宿
田中 久子	担当：グループホーム華寿園	・サリュールあさひ式番館
中島 玲子	担当：サリュールあさひ式番館	・フレンジィ本宿